

元明革命と仏教

藤島建樹

一三六八年、朱元璋はモンゴル族のたてた征服王朝「元」の支配を北方に駆逐して「明」帝国を建国した。この元・明交替すなわち元・明革命に関して、従来より種々の論議がかわされてきた。

異民族政權を倒して、漢民族國家を回復した点を注視して民族革命として評価するもの。また、朱元璋が貧農の出身であったことからその集団を農民起義軍と見て、階級闘争的行動とするもの。さらには、朱元璋の台頭の基点となったのが、南宋以後急速にひろまった念仏集団の白蓮教であり、それに伝統的に世直し運動の一つの拠り所であった弥勒教や、外来のマニ教の要素も加わったものとして宗教的色彩を重視し、宗教叛乱の面を強調するものなどがあった。しかし、元朝の支配力低下による行政的あるいは治安的不安定を背景に一齐に蜂起した元末諸反乱発生の当初は、これらの諸要素がさまざまな人々の各々の利害関係の中でからみ合っていた。従って諸叛乱それぞれの性格も多面的な複雑さを有していたため、そのいづれを重要視するかによって論議は別れた。しかし、乱の当初はともかく朱元璋が次第にそれら諸勢力を統合し集約するにつれて、その複雑さも整理されてきた。現在では、朱元璋は既存の地主武装集団と合体した時点で、元朝をも含んだ伝統的体制の継承者・擁護者となり、以後明の建国期に若干の修正はあったが、その路線が守られ、革新的変革は見られず、元明革命は伝統的な易姓革命の域を出るものではないとの見解が有力と

なっている。

今その見解に異議をさし挟むものではないが、この時期に儒学者を中心とした知識人の動揺が見られた。清朝の史家趙翼は「元末殉難者多進士」(『廿二史劄記』卷三〇)の一文を記して、元朝に殉じた漢人官僚の存在を指摘した。一方、元朝治下で活動を封じられた学者たちは、朱元璋に新時代の到来を察知して逸早くその傘下に入るものもあった。いわゆる「四先生」と称される劉基・宋濂・章溢・葉琛の参加はその最たるものであり、以後の朱元璋政權の確立と、伝統的体制の継承という路線の策定に決定的役割をたはしたことは明らかである。このような儒学者の間での動揺とその帰趨は、すでに論考されたものもすくなくはないが、仏教界の動向についてのこの種の論究は見られない。

仏教も「元朝なかば僧に奪わる」の言に象徴される如く、おおいに國家的優遇を受けた。しかし一方では、モンゴル支配者層の尊崇を受けたラマ僧の専横な振舞いに伝統的中國仏教の危機を感じたものも存在したに違いない。このような背景をもった仏教界が、朱元璋の出現にどのように対応したであろうか。この発表ではその点を解明するための手懸りを得んとするものである。

この時期の仏教側の動きを具体的に示す史料はきわめて少ない。その中で先に述べた四先生の中で、居士として知られ、僧侶との交流も深かったとされる宋濂の著わした『護法録』は当時を語る史料として重要である。そこに掲載されている僧伝から僧侶らの動きを考察した。

朱元璋は至正十六(一三五六)年、南下して、集慶(南京)を占領し、応天府と改名した。江南の拠点を獲得したのである。これを契機として彼の政權樹立への工作が始まる。仏教への働きか

けもこのころに開始されたと思われる。具体的には、翌十七年にこの南京の大龍翔集慶寺を大天界寺と改め、著名な僧を招聘するなど、江南仏教を掌握する拠点としたことである。集慶寺は元の文宗がその潜邸を改めて寺院とし、江南仏教の拠点としていた大刹である。その継承と天界寺への改名の契機は、朱軍進攻当時集慶寺の住持であった孚中懐信の伝によれば、朱元璋が彼の説法を聞き、その言行の純粹さを嘉みしたことにあり、さらに寺の道糧の民間にあるものを役人を派遣して徴収させたと記し、集慶寺存続に意を用いていたことを述べている。

また、覚原慧曇も朱元璋に気に入られ、蔣山の太平興國禪寺の住持とされ、ついで先の大界寺の住持となり、明建国ののち、天界寺に仏教統領の機関として「善世院」が設置されると「統諸山釈教事」として仏教を統轄する地位に就いている。さらにこの慧曇は洪武三(一三七一)年に西域に派遣され、天子の威徳を布宣したとある。朱元璋政權への協調の様子が語られている。また、原璞土璋の伝には、朱元璋が浙西五府の僧侶道士を動員し、都(南京)の造築に従事させたこと。その役を善世院と土木作業にあたる将作監に董督させたことなどを記し、朱元璋が有力僧の招聘する一方で、僧・道に対し労役を強制し、威圧を誇示するとも忠誠心を試していることを窺わしめている。北方の五台山や大都(北京)で高名であった璧峯宝金も大都攻略後に南京に招き天界寺へ入れている事実なども併せ、朱元璋の積極的な仏教界への宣撫策がうかがえる。「僧伝」という史料の性格上、朱元璋から尊崇され、帰依を受けた如き表現が多いが、内実はほぼ同時期に展開される儒学者への積極的な招致と軌を一にする政權確立への工作の一環と見るべきであろう。

このように江南仏教界は朱元璋の慰撫工作に呼応し、おおむね柔順にその傘下に組み込まれたと思われるが、中には「力めて辞退して出でず。」とか、再三の要請に抗しきれず「不得已」出仕したがすぐに退帰したものなどもある。

白庵力金は「母を養うこと」を理由に退居したと記すが、出家者の辞退の理由としては素直には領けない。その他、白雲智度・清遠懷涓などの伝は、あからさまには述べないが、朱元璋の招聘に抵抗を示すが如き態度を感ぜしめる『護法録』の著者宋濂は朱元璋の側近中の側近であり、彼の書いた僧伝は彼と交流のあった人物である。従って明確に元朝に殉じたり、朱元璋批判を持つ人物は『護法録』からは除外されたであろうから、これだけでの判断は早計にすぎるのであるが、他の零細な史料を併せ考えても、朱元璋政權の発展期に江南の中国仏教界は比較的無抵抗にその支配下に入り、自らの地位と権益を守るための外護者を、元朝に変わって彼に求めたようである。

朱元璋はその出発の基盤である白蓮教が体制から邪教視され、動乱の拡大ともないますます先鋭化し、流氓化してゆくのを目のあたりにし、かつ自らの勢力拡大を考えると、白蓮教からの離脱を意図し、それに変るものを伝統的仏教と儒学者に求めたと思われる。一方、仏教界にとっても、元朝はすでに外護者として頼りにならず、新しい保護者を求めるとき、邪教白蓮教の伸展を阻止し、体制の継続を計るのは朱元璋が最適と判断したのである。ここに両者の利害が一致したのである。

朱元璋の集慶(応天府)入城当時から精力的な僧侶への接近は、むしろ儒者知識人の招聘に先行する積極的行動であったと考えられる。